



祇役中
郷信世叔

文久癸亥
乙

服部文庫
417
2187
8



117 特
2147
8

夏帝少師



和書清の和文

和書清の和文

和書清の和文

和書清の和文

和書清の和文

和書清の和文

117 1288 (2)

上巻之巻尾の巻紙に書かれたり

十二月十日

一 尾原の傳承書に「江ノ内山崎の山崎御屋三之助に
依て又此山崎の山崎御屋三之助の御屋に書かれたり」とあるに
右山崎御屋三之助の御屋に書かれたり」とあるに
傳承書に書かれたり」とあるに

一 尾原の傳承書に「尾原の傳承書に書かれたり」とあるに
井原の傳承書に書かれたり」とあるに
多人の傳承書に書かれたり」とあるに

外に但馬の傳承書に書かれたり」とあるに
外に但馬の傳承書に書かれたり」とあるに
外に但馬の傳承書に書かれたり」とあるに

一 十二月十日の傳承書に書かれたり」とあるに
右の傳承書に書かれたり」とあるに
右の傳承書に書かれたり」とあるに

一 右側堂下より教書正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡
一 傷之瘡瘡印解正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡
一 正之十の其瘡瘡正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡
一 正之十の其瘡瘡正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡
一 正之十の其瘡瘡正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡
一 正之十の其瘡瘡正之古友位元礼石鏡印解少山之瘡瘡

清江所書書目録

二月十五日

若年寄

有馬遠江守

二月十六日

江川左衛門守
右方右左右左

柳子鐘造守

同日 清側元

講武所奉行

志松左兵衛尉

二月十六日

清側元
講武所奉行
志松左兵衛尉

田安大納言及

右清側元通清右位清一等公行通清側元右出清側料十力
石清側元通清右位清一等公行通清側元右出清側料十力

二月廿二日

清側元

柳子鐘造守

右清側元通清右位清一等公行通清側元右出清側料十力
上意有之正千石お銀一

清側元
柳子鐘造守

柳子鐘造守

柳子鐘造守

右清側元通清右位清一等公行通清側元右出清側料十力
右側元通清右位清一等公行通清側元右出清側料十力

雨折二

柳系或天輔

右同日ハ侍法目見上之思有之相侍テ入侍ニテ侍里書
院侍法ヨリ相目ノ台山吹ノ旨ニテ入侍上侍法先侍供並
供ニテ圓ノ事有侍法目見侍法令ニテ之相守旨上之思有ニテ
入侍 一入侍以後侍自書院侍下殿ハ老中出席抄平
隱岐守始侍先侍供且又ニ条大坂伏見勤番ニテ布衣以テ之圓
ノ列居侍法令表侍右筆下阻御扱事連ニ

侍上侍中
以テヨリ

二月廿二日

侍里書院侍法

勝藤右衛門

信正

賴殿地

有馬遠江守

同日廿九日

侍上侍中
侍里書院侍法
侍代官
江川筆方ニ

侍法目見侍法

平岩次郎

二月朔日

侍上侍中
侍里書院侍法

侍代官

信正

侍上侍中
侍里書院侍法

賴殿地

二月四日

侍馬一疋

水戸及

侍上侍中侍法目見上之思有之相侍テ入侍ニテ侍里書
院侍法ヨリ相目ノ台山吹ノ旨ニテ入侍上侍法先侍供並
供ニテ圓ノ事有侍法目見侍法令ニテ之相守旨上之思有ニテ
入侍 一入侍以後侍自書院侍下殿ハ老中出席抄平
隱岐守始侍先侍供且又ニ条大坂伏見勤番ニテ布衣以テ之圓
ノ列居侍法令表侍右筆下阻御扱事連ニ

二月五日

侍上侍中
侍里書院侍法
侍代官
江川筆方ニ

大目付

招手對馬守

結城縣新

二大寺

林寺

信

古賀

寺

田脩理

二大寺

松平

堀

堀

之制法更張之義小之校法之建之身法之用之信之
右於英蓉之老中列坐同内之及之老中列坐

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

信

京都表之義身評議中之及書付三奉外在京因了後向
外方人方其書目面法下之寺醫比外處者九十一日勅
使所法物三系中抽之外七卿一橋及法旅敏之左向接
東形限之義切迫之法談判あり候之由法評判後上
橋殿外三人方接東形限之義之此度 公方様江戶表向
御之形限と法定機 公方様法上向之と表向の之作上邊
一橋及法評判變之處右之通法書面を以前八卿一橋
差出之相争之段一橋殿法如右之通法天斗相争之義
法書慮あり候共事存候事兼有之 勅諭之由書
天斗人民攘夷一定子之由人々之致七難之五乱之程

右同の法用之義身
右於法右各隊感老中列在法内之及之老中列
坐

城引長匪令無却制^却此^二く^一み秋^一冷^二才^一に相^二半^一の^二我^一と^二は^一
馬と^二は^一その^二幸^一馬^二并^一の^二根^一を^二我^一に^二任^一し^二馬^一
收^二る^一馬^二も^一を^二は^一る^二在^一度^二の^一我^二と^一往^二川^一馬^二も^一馬^二半^一の^二哀^一院^二
の^二み^一子^二の^一天^二の^一家^二の^一女^二の^一世^二の^一を^二法^一保^二慮^一の^二世^一界^二の^一あ^二ら^一
は^二る^一馬^二半^一の^二謀^一子^二の^一我^二の^一名^二を^一馬^二半^一の^二不^一道^二口^一布^二の^一取^二鐘^一を^二馬^一
し^二て^一の^二精^一を^二奉^一存^二の^一右^二件^一の^二を^一不^二容^一易^二の^一大^二事^一件^二の^一を^二あ^一ら^二る^一
危^二存^一の^二拘^一り^二の^一我^二の^一身^二を^一我^二の^一道^二の^一危^二を^一不^二務^一中^二の^一
二^一日^二の^一豊^二多^一の^二及^一三^二奉^一の^二大^一法^二自^一身^二の^一法^二内^一の^二事^一を^二あ^一ら^二る^一評^二民^一の^二不^一
こ^二の^一面^二を^一あ^二ら^一る^二水^一和^二少^一の^二枝^一 桐^二野^一の^二評^一民^二の^一評^二民^一の^二評^一民^二の^一
以^二急^一使^二の^一を^二此^一程^二中^一の^二を^一微^二論^一の^二者^一を^二あ^一ら^二る^一而^二は^一法^二因^一
行^二の^一

二^一日^二の^一豊^二多^一の^二及^一三^二奉^一の^二大^一法^二自^一身^二の^一法^二内^一の^二事^一を^二あ^一ら^二る^一評^二民^一の^二不^一
こ^二の^一面^二を^一あ^二ら^一る^二水^一和^二少^一の^二枝^一 桐^二野^一の^二評^一民^二の^一評^二民^一の^二評^一民^二の^一
以^二急^一使^二の^一を^二此^一程^二中^一の^二を^一微^二論^一の^二者^一を^二あ^一ら^二る^一而^二は^一法^二因^一
行^二の^一

天子相本与殿下く侍入る事本処を夜殿を侍りて
夜に平侍片々侍入る事宿司及方侍入る相本様事
形限侍本相本名処書面より侍良らる事と方侍本
左に過侍る出る相本

一様事 江戸表陽者との速く可成る様事

一先代中よりある者共侍本を候下り左出れば
右に過侍れば其様事候本御同及下侍本内より
右に過侍れば其様事候本御同及下侍本内より
左に過侍れば其様事候本御同及下侍本内より
相本下侍る事候本御同及下侍本内より

天子侍り相本様事候本御同及下侍本内より
十日三侍面談は侍入侍り候本御同及下侍本内より
中本候侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
夜侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
越侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
二侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
二侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
山殿侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より
侍出侍り侍入侍り候本御同及下侍本内より

評議多し^る馬ノ退^出と馬評論^有亦^名馬評定
も不^レ本馬^更論^有亦^名馬評定^中之^後子^故馬評定^中
馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中

以^レ馬使^家之^様馬評定^中之^後馬評定^中
馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中

上^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中

右^家前^之連^名一^枚中^之馬評定^中

馬評定^中之^後馬評定^中

右^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
論^有亦^名馬評定^中之^後馬評定^中
合^レ儀^右馬評定^中之^後馬評定^中
馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中

右^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
斗^ニ河^ノ橋^ノ度^儀馬評定^中之^後馬評定^中
右^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
方^ハ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
烈^ニ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
右^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
以^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中
東^レ馬評定^中之^後馬評定^中之^後馬評定^中

おんをたのむるを法にちりしるる法向相本なるに却
る法趣之を違ひて多分ゆりやめ氏にん斗相本中此件
徴有に旧雜中し年終り終し年々儀に法にちりしるるに
つ出たてお出さすといふ事と路とに法にちりしるるに今付高
廻りお出五十年一高とて三高をいひてうとてお中市中
近し知れ相違なる外今一婦女を連送す相中越り
最交お廻り知りて受をいひ天押しる法相中い存
中とて中地ら及法向法に法にちりしるるに

二月十日

水
|||
木

天助七言
相本三言
同本三言

二月某日諸有是三五餘人買名肉の道各三三は百良
在諸有司と業とて覚有姑息偷あるに法以法にちりしる
お、又受て處に二三受て法にちりしるるに法にちりしるるに
法にちりしるるに法にちりしるるに法にちりしるるに
中一 歳度水泡に法にちりしるるに法にちりしるるに
命脈お絶頭お絶頭を法にちりしるるに法にちりしるるに
標及に標及法にちりしるるに法にちりしるるに法にちりしるるに
存夫に法にちりしるるに法にちりしるるに法にちりしるるに
疑令お法にちりしるるに法にちりしるるに法にちりしるるに
了此と中一夫と中一夫と中一夫と中一夫と中一夫と中一夫と

于徳に差を修め制度改訂し向後第一も我の制度を堅
平程に治し至るに主秋法打拂に相成りし即據て法起
言ふは昔奉安殿處人心も世に之を思近野人語後日におま
り治すに法構法を人の已法大陣に存せり秋世とらるお取し
諸君者一者共全く法役人方し此自若あり死を畏るの処より
斯く東に後處に法起すにのみ人の思く此度年め曲解
此に世より其改訂し之を悟りて法起すに義法是定
トらぬ事とて其者へ全權法を何れに任せしに其
二思しめ何れも不此に及ぶ法起し是公武法一のし不様
して何れも法起すに哀れ思て下つ妙法に法起すに思
生すに極法起すに法起すに思し至るに私に思し法起す
此の法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し

依るに法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
存此に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
内此に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
南に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
之思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
更に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
存此に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
但存此に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
又柄に思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
二思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し法起すに思し
存此

返る牙無き人信者よりこの関元がらむは此道入るといふ
下りゆき言の古書に中人入る事云々但し其言の五言に
しりし事申すは此佛の三教の事といふ水府及四市は門道といふ
今この書は州名をいひてある事其具は信者たる人の影といふ今六
佛の法名は此書に原未何の事なる事云々

相宗の宗なる事云々此中人宗に此書に大目録ありといふ事云々
と申す事云々此書に中より尤も其書に事しる事云々
平頼子附下れは此書に名は此書に事云々但し別世に事云々
此書に事云々此書に事云々此書に事云々此書に事云々
此書に事云々此書に事云々此書に事云々此書に事云々

佛製賜一物反 上巻

十三年此書に水より事云々此書に事云々此書に事云々

同 下巻

此書に事云々此書に事云々此書に事云々此書に事云々

三月廿七日

左井右京大夫
代り
阿戸橋藤守
阿井藤守
大久保かたき

相了大膳亮

兼以此任出通美玉里了禮法年不空鳥打柄二月市
中于外延了及要徒并御細之政知也七難斗一依
二于方共所云攝一之付了了教一人教差出至
后若也不限所存月又通之指サ指之若之魚次才
十日換云捕一吋宜了穿打果了而も不若了長委
細之委大町奉仍了了了候令

三月

四月朔日

大月

法基定以味役

新米大入進

第石下上向

信了 寺社奉行

牧野越中

大月付 寺社奉行

町奉行

井之儀限了

法基定以味役

信了 寺社奉行

堀内了

土居了

法基定以味役

新米大入進

右海老

法基定以味役

四月十日

大月

法基定以味役

松平了

法基定以味役

地由伊了

法基定以味役

新米大入進

信了 寺社奉行

右大坂長

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

四月廿二日

大月

法基定以味役

松平了

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

相廻状

大月

法基定以味役

八柳了

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

大月

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

法基定以味役

尾の侯上法取候ありし事ら外玉より法取に
多しと云ふ人々も威勢力推折ト云

一^{四月十三日}長崎法推修身法取席修並諸席打込共加

加布加次松平筑前守等にてありし方大目付は法連より

一^{四月十四日}五山大徳寺法取之事も豊前法取役主より呼神奈川警

備に任付し法取事申外在付法取の所外法取人数

法取左出より法取元右め法取本多伊藤守松平信由

酒井乙武守松平神奈川法取國之任付ありし酒井侯

一^{四月十五日}法取年一守り多し年法取勤よりあり

一^{四月十六日}江内侯新徴旭之丞法取事依依し市中法取大徳寺

美々法取之てり本名は任付し

一^{四月十七日}豊前守も松平守も江内如小田原多川三時

お下候法取本名法取呼ありし先達も法取内紀在任付し

一^{四月十八日}豊前守も松平守も一同じに氣込里変候一昨日松又別

取し法取守は任付し処ありし松平武威ももて法取松

平も法取守も一同じに氣込里変候一昨日松又別

取し法取守は任付し処ありし松平武威ももて法取松

平も法取守も一同じに氣込里変候一昨日松又別

百十二

一^{四月十九日}姫岡松代侯神奈川國之任付し尤方々市中不徳辰士共松

長安生年之記是死時引了了死すし中出能死後三々一先
在念中してふつ死すと又長月る、信寺社奉外の好
出処打部ノ法多中一法退能もいつ水夜又了
与死時と若中下り身在候之期は急連て身月法
向中を相待是死中より候了此下テ夜五時以迄都処人馬
退出して連法退能也其とて信僧之流後死すや外
而若ら退生候本にうりて去る物を思ひ了故死を
信武若志お信つら信付少一先出候了死は終りし
その候も大きむを出し先再所ニ籠まふ本お信つら
信付し、身月候信不富此一を水大籠斗をこころ外

こ武若志お信不ら信付たしを何処生候て人候をよ
尤きねを出し故に在候中し、去降一候う動よとい
籠のつ下し不故、身月候折之処使信まらた、つ動世
下るいし、此れ下何、身月寺社奉候もつ才口、由こ

之者危しむる付倒しりたりみり後ニ座敷大分切せり
由是り座敷を以てり破人引出し座敷を建てるれり
人之志向不構功と云う刀を柄杓の意に而して座敷を少少
之者破れり此の事毎夜板橋を通ひて又坊主を佛
やぐ多座敷を以てし不中りて又座敷の中謀りて此の事
お出し笑ひ形中一人之平生のいと要事なる事
困形中は又海宴中もいさゝか礼を致す南の事
口夜倦し松よおしおて中一夜入志向座敷の中不彼
破人つしりもあゝ互に談笑必し同座に坐し出に座敷
主ニ頼み申す五の夜事おつし座敷大分切せり八の夜事

下浪士世話役ト認表門張り足、争務殊小能く出来
りし中寺中人も以て且るうそく之不務お兼い
座敷の中酒器も都ておし納不出合と小皿数人前にお
お度又物しりも書り付、引くくはる越又お八口し
款度より、挨拶丁寧し中ハ又阿ノ張札内廻り
座敷におしお八口しりも了りて多し此座敷の同座敷
不中事寺中おし位、多人敷右之令々廻り
越しりしお礼を不備し酒を各持及旭の
まち座敷上夜入頼及おし法座敷上座敷
おしけり

浪士共信の事と思ひを尋 天板不取はしりてしるすも信持
系に本十人の子ありて其の所割を以て其の彼是以此事以て少若
川の及足勢及公より付て多利浪人の者或は差矯を伐て入
れ又之は「い」又之書も終へ終りて来者持来此の内書
其勢多山ありて由出之は二三日の間ありて左の系
其出之し子たすき通延を悔い跡を承て其下中あり相見
云板諸浪人の長き名を不分明名之八郎と申す事も之を
白濁の事也山口の松之平臥降りてす、ト申出り列

三日の夜 外より来る
信持三つあり 奥田より来る

三日の夜 山口信持
信持三つあり 山口信持

大板表のり馬用土砂越、柱マダ

三月の夜 大板のり
信持三つあり 大板のり
信持三つあり 大板のり

信持三つあり 大板のり
信持三つあり 大板のり

同日の夜

大板のり
信持三つあり
大板のり
信持三つあり

一 古く京師に遷る迄の事

一 西久保万重の事

如所の河内は此の事

且此一但是此の事

此の事

一 一 一 一

又此一井とある事

一 一 一 一

一 中山程神の上

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

一 一 一 一

出三後之... 殿... 朝... 印...

右... 印...

三月... 印...

大... 印...

三月

